

美術の窓(10)

サン・サヴァン教会堂のロマネスク壁画
との邂逅(一)

大和文華館館長 吉川 逸 治

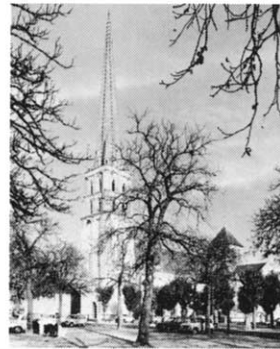
昭和の始め、東京帝大の文学部に入って早々に、団伊能先生がなさっていた西洋中世美術史の講義で、サン・サヴァンの壁画のライドを見たのが、ロマネスク絵画との最初の出会いだったと思います。当時としては珍しい程、沢山の写真で、各地のさまざまなロマネスク建築や彫刻を次々に見せて下さって、若い西ヨーロッパが大混乱を治め、古いローマの伝統を乏しい資力で支えながら、新しいゲルマンやケルトの技術、遠来のオリエントの要素を加えて、苦勞しながら、初めて彼等の社会の美術を築き出しているのに心惹かれました。城のような大石積で、ところどころに厚手の唐草模様の彫物が刻まれるイメージに混って、何枚かのサン・サヴァンの壁画が映し出されました。プロスペル・メリメ(1803~1870)が複製させた石版刷の図版から作ったスライドですが、大きな立姿の神が日と月の円盤を半円形の天空に掲げるところなど、創世記の言葉が遠くから響いてくる感じでした。

その頃、幸運にも、東京駿河台の財団法人日仏会館にフランス学長として、パリのギメー東洋美術館のジョゼフ・アッカ館長が就任されて居られ、旧制浦和高校の文丙出身はフランス語の稽古のために会館に出入りして、アッカ館長に知られ、大学の二年生の時、フランス政府の給費留学生の試験を通して、三年の時、直接アッカ館長からフランス中世美術の個人講義を週一回受けるというところまでゆきました。西洋美術史

の勉強から、東洋美術へ移ったと言われる先生は、当時パリで問題となっていたバルトルシャイティスの名著を取寄せて、一緒に読みながら、ロマネスク彫刻の問題を説明して下さいました。卒業論文のテーマは、キリスト教の教会堂建築の形成される状況がよかろうと言われ、東方キリスト教美術に関する学者の諸説を教えていただき、問題の中心がどこにあるか暗示されたと思っています。

初秋、一ヶ月余りの船旅で、マルセイユに上陸し、直ちに夜行列車で、翌朝、パリのリヨン駅に降りますと、一年前から来ている留学中の飯塚浩二さん、森忠一さんたちが迎えに来て居られて、迷うことなく古めかしい豪華な駅の建物をあとに、タクシーで黄葉したマロニエの街路樹の間を抜けて、セーヌ河を渡ると、橋の上から彼方にノートル・ダム尖塔が見える。パリへ着いたと身も心も感じた。落着く宿は、当座は大学都市の薩摩会館といわれた日本学生会館で、出来て年数も経ず、清潔で部屋も広いのですが、ここにはフランス語の勉強にならないし、フランスの日常礼儀作法を学ぶ機会にもよくないと、市中の下宿を探すこととして、一ヶ月後に、森田慶一先生のお勧めで、カルチュ・ラタンの上の端にあたる大通の奥のジョーム先生という中学校のラテン語の先生のとこに、仏独四人の学生さんと一緒にお世話になりました。

大学の講義は十一月一日からというので、それまでに入学、在籍



サン・サヴァン教会堂の外観



玄関廊の壁画「再臨のキリスト」

の登録を済ませ、団伊能先生がリヨン大学で教えると言われ、アンリ・フォション教授に紹介状を書いて下さったので、それをもって、パンテオン広場にたどりつき、そのすぐ横の静かな裏通りのお宅に上がった。慎しい客間に二ヶ月間に学修する順序をすぐ紙に書いて下さった。二ヶ月で四単位をとると、学部終了(リサンス)の資格が得られ、それからドクトル論文を準備することになる。数年はかかるだろう。講義は、新しくできた美術史考古学研究所で行うと言われ、今年度は近世美術史と日本文化史、来年度に中世と古代をと決められ、日本文化史は、フランス語の文章を知り、論文を書くのを学ぶのに必要だからとのことでした。ミシェル・ルヴォン老教授の日本文学史は、本はよいが、講義は駄目で、やめてしまった。

これに対して、ルネ・シュネイデル老先生の講義は、フランス・ルネサンス建築史で、その後もシャトー見物の度に思い出しますが、西洋建築の規定通りの形式を学ぶのには私のような初心者にとって適切でした。それより、翌年、十七世紀の現実(レアリテ)の画家展が開かれる以前に、私たちに先生の講義で、ジョルジュ・ド・ラトゥールなどの作品を教えられ、一

作ごとに、構図・光線法・デッサンと秩序正しく、しかも細部まで比較して、講義して下さいるので、いかにも、フランス流の方法に接したと感激しました。単純だと笑われるかも知れませんが、当時の助手が秀才のドリヴァル教授、後にジョルジュ・ド・ラトゥール研究を大成したパリゼ教授や版画研究の権威アデマール、ヴェルサイユやモネーのジヴルネ邸の復興で知られたヴァン・デル・ケンプも同じころの聴講者で、後に彼らと屢々この名講義が話題になりました。

六月には全体に関する問題、いくつかの作品に関する分析、それにテキストを読んで訳す語学、歴史、美学と、三週間を単位の試験に追われて、長い夏休みになると、それぞれ故郷のお屋敷に帰るとか、パリ人なら別荘に行く。アッカ館長先生は、フランスを知るためにと、中部フランスのロマネスクのモニュメントの沢山ある地方の中心都市ボワティエに知人を介して、私の下宿を見つけて置いて下さった。七月はパリの夏を楽しんだ後、八月になって、古都ボワティエに出かけ、この町の下宿に泊って、毎日、沢山の教会堂を一つ一つ見物したり、町の外に出て古蹟、遺物を探したりする呑み気な休暇生活を始めました。(つづく)

季刊 美のたより No.66

昭和59年 2月 16日

発行 大和文華館